

はしがき

一、本書は、上代・中古の日本文芸の代表的作品を、なるべく多く掲げるようにつとめました。ただしそのために、各資料があまりに断片的になって、その作品の真の姿を見失うようなことがあったり、学習の興味をそぐことがあったりしてはならないと考えて、できるだけ本書に掲げた資料だけで、その作品の全貌がわかるようにしましたし、またそれが不可能な場合でも、その作品の特質は、本書の資料だけでいちおう理解できるように、十分考慮しました。なお作品を選ぶにあたっては、特に国語の基本的語句の知識の習得が達成されるように注意しました。

二、頭注は、学習者がほかの参考書を用いなくても、自分で下読みができる程度に、やゝ多く付けました。

三、各作品の前に、作者・作品に関する解説を付けて、学習の便を計りました。

四、はじめに概説を、おわりに年表を添えました。本文・解説とあわせて、上代・中古の文学史のだいたいに通ずることができようと思います。

五、各資料には、さし絵を豊富に入れ、国語学習を楽しみながら、おのずから効果があるようにしました。

六、本書の編集は、上代文芸については五味智英が、中古文芸については松尾聡がこれを担当しました。

(附言) テキストの用字については、原則としてはできるだけ統一する方針をとりましたが、原作または伝写本の本来のかたちをのこすほうがよいと思われる場合などには、かならずしもそれに従いませんでした。頭注の漢字によみがなをふる場合は、括弧でくくって本行にそのよみがなを入れるのが、よみやすくてよいのですが、紙幅の都合上、細字のふりがなをほどこしたことが多かったことを諒解していただきます。

要注 新校 上代・中古文芸新抄 目次

はしがき……………二

上代文芸概説……………五

古事記……………七

風土記……………三

記紀歌謡……………六

万葉集……………五

中古文芸概説……………七

竹取物語……………九

伊勢物語……………二七





古今和歌集	110
土佐日記	120
宇津保物語	122
枕草子	120
源氏物語	100
更級日記	110
堤中納言物語	121
大鏡	121
今昔物語	121
梁塵秘抄	122
山家集	100
上代・中古文芸史年表	104

上代文芸概説

上代の下限は奈良時代の終であるが、上限の方はほんやりとしていて明確でない。従って上代が何年間であるかもわからない。これは中古以後の各時代と大層ちがう点である。

日本民族がある程度の文明を有するようになり、文学を生み出して来た時期は確言することはできないが、他の民族の状態を参考にし、また残された文献にわずかながら存する原始時代の痕跡を手がかりにして、大体の筋道を推測することは不可能ではない。どの民族もそうであるように、わが民族もはじめに有した文学は口誦文学であった。文字のない時代には口誦にたよるほかないからである。神話・伝説・説話・祝詞・祝詞・歌謡などすべて口頭で伝えられ、耳で聞くことによつて享受された。口頭で唱えられるということはおのずから律調を要請する。祝詞や歌謡はもとより、神話・伝説・説話も現在記録されて残っている形よりはるかに韻律に富んだものであったにちがいない。古事記の「うけひ」の段や出雲国風土記の「国引き」の段などにはその面影がうかがわれる。

口誦文学は浮動性を有する。それは口から口へと伝わるうちのなまりにもより、また意識的な改変にもよる。改変がかなり自由に行われたのは、口誦文学が個人の作品ではなく、集団により生み出され保持され、集団のものとしていたからである。皆のものであるから皆の意識の交遷に伴つてかわつてゆくのは自然なことだったのである。

神話や祝詞はもちろん、その他のものも神に係属することの多いのは注目すべきで、これは古い時代にさかのぼるほど人間の生活が宗教的雰囲気^{宗教的雰囲気}に厚くおわれているからであり、この点から文学の発生と伝承とを説明しようとする学説がある。文学は生産等のいわゆる実用的方面や喜怒哀楽などの感情生活をも機縁として生まれて来たものであろうが、宗教的機縁による所の大きかったことは疑いをいれない。

大陸との長い間の交渉により漢字を習得し、それによつて日本人が日本語をしるすことができるようになったのは五世紀ごろだったらしいが、はじめのうちは量も少く程度も低かった。それがやや進んだのは推古天皇時代（六世紀終りから七世紀にかけて）であり、以後漸次進歩して万葉集に見られるような自在な用字法を獲得するに至つた。この記載方法の獲得は、大陸文化の流入や個人の自覚の発展と伴つて文学の上に大きな変動を起した。すなわち個性的記載文学の発生と発達である。日本書紀の歌謡のうち個性的な点のある

海佐知毘古と山佐知毘古

- 一 木花之佐久夜毘売が、産殿に火をつけてお産をし、火の盛んな時生まれた御子。火の照り輝く。ただし元來稲の穂の赤く熟するさまをいうのかと思われ。
- 二 佐知は幸で、漁獵で魚や獣などを得ること、その道具、またその獲物。
- 三 鱸の広い魚、狭い魚で、いろいろの魚の意。
- 四 火照命の末弟。火の方からいうと火勢の弱る意、稲の穂についていうと、実って握む意。この神の別名は、天津日高日子穗手見命。
- 五 毛の荒いものと柔らかいもの、すなわち種々の鳥獸。
- 六 強く請求した。

七 潮路を知る神、すなわち航海の神。ヘソラツヒコともよむ。天津日高の天に対して、空は天と地の間をさすという説がある。

- 一 竹と竹との間を堅くしめて、すきまのないように編んだ籠。
- 二 良い海路。
- 三 ヌツは五百箇とも、神聖とも説かれていゝる。前者とすれば伎築の繁った桂、後者とすれば清浄な桂の意となる。



かつら (桂)

- 四 侍女。
- 五 玉は美称。モヒは酒や水を入れる器。

六 玉となつてゐる本もある。

かれ火照命は海佐知毘古として、鱸の広物・鱸の狭物を取りたまひ、火遠理命は山佐知毘古として、毛の荒物・毛の柔物を取りたまひき。こゝに火遠理命、その兄火照命に「各にさちを相易へて用ゐてむ」と謂ひて、三度乞はししかども許さざりき。然れども、遂に纒に得相易へたまひき。かれ火遠理命、海さちを以ちて魚釣らすに、都て一魚も得たまはず。亦その釣をさへ海に失ひたまひき。こゝにその兄火照命その釣を乞ひて、「山さちも己がさち、海さちも己がさち、今は各々さち返さむ」と謂ふ時に、その弟火遠理命「汝の釣は魚釣りしに、一魚も得ずて、遂に海に失ひてき」と答へたまひき。然れどもその兄強に乞ひ徴りき。故其の弟、御佩の十拳剣を破りて、五百釣を作りて、償ひたまへども取らず。亦一千釣を作りて、償ひたまへども受けずて、「猶かの正本の釣を得む」と云ひき。こゝにその弟、海辺に泣き思へて居ます時に、塩椎神来りて問ひけらく「何にぞ、虚空津日高の泣き思へたまふ所由は」ととへば答へたまはく、「我、兄と釣を易へて、その釣を失ひてき。ここにその釣を乞ふ故に、多の釣を償ひしかども、受けずて、猶その本

の釣を得むと云ふなり。かれ泣き思ふ」とのりたまひき。こゝに塩椎神、「我、汝が命の為に善き譏作む」と云ひて、即ち无間勝間の小船を造りて、その船に載せまつりて、教へけらく、「我この船を押し流さば、差暫し往でませ。味し御路有らむ。乃ちその道に乗りて往ましなば、魚鱗の如造れる宮室、それ綿津見神の宮なり。その神の御門に到りましなば、傍なる井の上に、湯津香木有らむ。かれその木の上に坐しまさば、その海神の女、見て相識らむ」とをしへまつりき。

かれ教の随小し行でましけるに、備にその言の如くなりしかば、即ちその香木に登りて坐しましき。こゝに海神の女、豊玉毘売の従婢、玉器を持ちて水酌まむとする時に、井に光有り。仰ぎて見れば、麗しき壮夫有り。甚異奇しと以為ひき。かれ火遠理命、その婢を見たまひて「水を得しめよ」と乞ひたまふ。婢乃ち水を酌みて、玉器に入れて貢進りき。こゝに水を飲みたまはずして、御頸の珠を解かして、口に含みて、その玉器に唾き入れたまひき。こゝにその珠、器に著きて、婢珠を得離たず。かれ珠著けながら、豊玉毘売命に進りき。かれその珠を見て、婢に「若し門の外に人有りや」と問ひたまへば、「我が井の上の香木の上に人坐す。甚麗しき壮夫にます。我が王に益りて、甚貴し。かれその人、